

第3回あゆ有効活用計画検討会議 議事概要

■開催日時：令和3年11月17日（水）13:30～16:00

■開催場所：高知県立高知県民文化ホール

■出席委員：黒笹委員長、霜浦副委員長、東委員、岡林委員、西脇委員、林委員、林田委員、藤本委員、堀岡委員

■議事：

（1）ビジョンの素案について

- ・別添資料1に基づき事務局より説明

（委員等からの主な意見）

○ビジョンの柱1の取組方針②旅行商品づくりのための環境整備について

- ・具体的な取組の中に「あゆ漁インストラクターの人材育成」というのがあるが、インストラクターが身に付けるスキルにはどういったものが必要かを西脇委員に教えていただきたい（黒笹委員長）
- ・自分が釣れること、周りを見る余裕があること、どこが危険なのかといった川の現場を熟知していることが必要。また、救急救命の講習も受講しておく必要がある（西脇委員）
- ・この取組を事務局はひし形にしているが、これはあゆ王国高知を売るためにかなり重要なポイントなので、二重丸で取り組む項目だと思う。事務局には、人材育成をもう少しスピードアップするような方法がないのか検討していただきたい（黒笹委員長）

○ビジョンの名称について

- ・高知県は90年代初めまでは「あゆ王国」だったが、現在は「あゆ王国」と呼べる現状ではない。高知県を売り出していくうえで「あゆ王国」はインパクトがあつていいとは思いますが、他県のあゆを研究している人は、高知県が「あゆ王国」を名乗ることには意外という印象を持つ。このビジョンは県民に向けて発信するものなので、これを見た県民が高知県は「あゆ王国」であるという誤った認識を持つおそれがあるので、この名称については疑問を持っている（東委員）
- ・あゆ王国「復興」ビジョンとなっているが、実際には「復興」ビジョンのように考えており、「あゆ王国」だった高知県をもう一度本当の「あゆ王国」に戻したいというメッセージを県民に伝えたい。他県の方には、「昔は高知県は「あゆ王国」だったから、もう一度それを目指しましょう」というメッセージとして名称を付けていると説明すればいいのではないか。かつての高知の川に戻りたいというのは、それこそ県民全員のビジョンだと思うので、そういう思いを込めて名称をつけたい（黒笹委員長）
- ・高知県が全国に誇ることができるのは、天然あゆが上ってくる河川が多いということ

であり、それだけ自然が残されている川が多いということなので、これは十二分にアピールしたらいいと思うが、あゆの漁獲量が多いということを前面に出すことには疑問がある。このビジョンは、あゆのことをあまり知らない方に向けて出すもので、行政も慎重に考える必要がある（東委員）

- ・あゆを売り出すことで、あゆを守り育てる機運が高まるということには強く賛同する。ただし、川の資源は脆弱ということの基本として押さえておかなければならない。資源にあまり強い負荷を与えずに利用することが原則であるから、そのような観点から、前の会議でも目標を設定したほうが良いのではないかと発言した。あゆはいくらでも獲っていいものではないということを念頭におきながら利用するということを忘れてはならない（東委員）
- ・「もっと獲っていいよ」という一般の方へのメッセージになってはいけないというのはその通りだと思う。ただし、現在獲られているものを、流通をしっかりと、もう少し有効に利用して、もっと多くの人に食べてもらおうというのがこのビジョンの趣旨なので、一般の方に誤解がないような表現を意識して、ビジョンの策定を進めていただければいいかなと思う（黒笹委員長）

○ビジョンの取組主体やPDCAなどについて

- ・ビジョンの取組を誰が支えていくかの調整が難航すると思うが、一定その目処を付けた状態でビジョンを公表しないと、ビジョンだけが完成して具体の事業が動かないのではないかと（岡林委員）
- ・26 ページの県関連施策について、実際にこのビジョンを進めるのであれば、このビジョンに沿って事業を提案してきた事業者などを支援するための施策が必要であり、ここに記載されている現在の県の施策だけでビジョンを動かそうとするのには無理があるのではないかと（岡林委員）
- ・24 ページの基本的な役割分担について、事業者、漁業関係者、観光関係者となっているが、このビジョンを進めていくうえで、大学、文化施設、商店街など、もっと幅広い人がかかわってくると思うので、もう少し対象をひろげるのがいいのではないかと（岡林委員）

(事務局より回答)

→どこが担うのかについては、現段階で調整がついてないところもあるが、4月にPDCAを回していく協議会を立ち上げる予定なので、4回目の当検討会議とその協議会の立ち上げの間に、どこがチームリーダーでやっていくのか調整を図っていきたい

→県の関連施策については、今の段階でどこが取り組みをやっていくのかが決まっていないうちで、新たな事業を組めるものと組めないものがある。取組を進めていく中で、現状の県施策では対応できないことについては国の補助の活用や、次年度以降に新

たな事業を検討していくことが必要だと考えている
→事業者については、もう少し分かりやすく、対象を広げた書き方にしたい

- ・この計画は、プランではなくビジョンとなっているが、ビジョンというのは将来像とか理想的な将来の姿というもの。プランとなると、PDCAを回すために目標が必要で、具体的な詰めをしておかないとPDCAの回しようがない。獲れたものをどうやって流通販売していくかについては、林委員も問題提起されていたが、未解決の問題がたくさんある。あゆを売り出していこうということには賛同するが、まだ3回しか開催していない会議で具体的な取組まで落とし込むのは時期尚早だと思う。ビジョンかプランか、どこまで実行するのか、その線引きをしっかりとっておかないと、実際に取組まれる方が困るのではないか（東委員）
- ・PDCAを回すにはKPIも必要になってくる。今どの段階なのか、どの段階まで行きたいのか、事務局で全体のタイムスケジュールを想定しているのであれば教えてほしい（黒笹委員長）

(事務局より回答)

→この計画はどこが何をやるのかという具体的なものが決まっていないので「ビジョン」としているが、ビジョンがビジョンとして終わらないように、並行して具体的に進めていく取組を盛り込み、ビジョンとプランが混ざったようなものとしている。最終的に4月の会議までに役割分担をする必要があると考えている。

- ・ビジョンに留めておくなら総論的なことだけ書いておけば良かったが、事務局は誠実に具体的なところまで記載しており、これは前向きに取り組もうとする証だと思うので、このまま見守るということでどうか（黒笹委員長）
- ・24ページのPDCAサイクルについて、いつ、だれが実現するのかが具体的にないと当然PDCAサイクルは作れない。事業は2年間となっているが、2年間の中でどこまで実現するのかがビジョンの中に出ていない。どの段階まで実現しようとしているのかをもう少し明確にしておく必要がある。長期的（5年、10年）なロードマップ（見取り図）をこのビジョンの中に併せて示しておけば、2年間の位置づけも明確になるのではないか（霜浦委員）
- ・ご指摘のとおりだと思うので、それらの点を踏まえたうえで、今後のビジョン策定に生かしていきたい（黒笹委員長）

○その他

- ・北川村の火振り漁の体験観光については計画段階だが進めることができる（林田委員）
- ・高知市内であゆを手に入れる機会がないので、売り方を考えれば高知市内でも売れると思う。東京の知り合いに冷凍あゆを送ると評価が高いので、東京でやるにしても売り方次第だと思う（堀岡委員）
- ・全国的にも珍しい火振り漁は大きな観光資源なので、これでツアーを組むことは充分できる。教育現場と一緒にあって、子供たちに生き物を大切にするんだという体験をやっていくことが必要。あゆを活用した商品作りはできると思うが、関連する様々な法律に抵触しないように注意しないといけない（藤本委員）

（２）ビジョンの具体的な取組について

- ・別添資料２に基づき事務局より説明

（委員等からの主な意見）

- ・県版のふるさと納税は高知県が高知県全域のものを使える仕組みなのか。また、すぐにできるものなのか（黒笹委員長）
 - そのとおり。市町村の場合は地域が限定されてしまうが、利きあゆセットを送るなら、県全域のものが使える県のふるさと納税が必要なので提案した（西脇委員）
 - 県庁の政策企画課が所管しており、事務を民間に委託しているが、どのくらいのスピードで進められるのかは調べておく（事務局）
- ・四万十市はふるさと納税で遊漁証の年券を返礼品として出しており、もう少しPRしたらもっと人を呼べるのではないかと（堀岡委員）
- ・釣りで人を呼び込む際の一番の課題はトイレ。県に支援策はないか。
 - 奈半利川で冬季のアマゴ釣り場を開設した際も、入川経路、トイレ、駐車場が問題になり、一定、県の方で近隣に協力を依頼したり、駐車場案内の立て看板の設置をしたが、基本的には地元の市町村が対応するものと理解（事務局）
- ・仁淀川のアユとお酒のセットはとても良い。あゆに限らず、そこで獲れたものとその水は合う。そういうものを伝えながら商品化していけばかなりいいものができる（藤本委員）
- ・この取組は、スタートアップしたあとの情報戦が必要になってくる。あゆに関わる様々な情報を何らかの形でポータルで見られるものを作った方がいい（黒笹委員長）
- ・あゆの場合は、観光、食、教育など、それぞれの分野のコミュニティで情報が発信されているが、それを繋げられるような役割を果たすものが必要ではないか。そのため、インスタでもフェイスブックでもいいので、まずアカウントを作って始めてみたらどうか。あゆは6～8月が情報流通の盛期なので、今のうちにフォロワーを獲得して、

来年のシーズンには情報を流せるようにしたい（岡村アドバイザー）

- ・岡村先生にプラットフォームを作っていただき、そこに各委員さんそれぞれが、自分のあゆについて関心のあることを投稿していただければいいと思う。あゆを食べる時期に検索が多いが、体験漁業や資源保護の取組、産卵場造成のことなどに対して関心を持つ人を県内外に増やしていけば、あゆに興味を持つ人も増えてくるので、そういうことが、この会議をきっかけにできてくればいいと思う（黒笹委員長）
- ・東委員と霜浦委員がご指摘されたことに対して3つ提案がある（岡村アドバイザー）
 - ①資源の確保・保全と活用は両輪だということを我々は肝に銘じてやらなければならないので、ビジョン12ページの3-1 下部の文章には、現時点で活用のことしか記載がないので、ここに資源の再生に関する文言を書き込む
 - ②「あゆ王国高知」という言葉については、「昔・かつて」、「川は間違いなく日本一」、「目指す」、この3つのキーワードを入れて「あゆ王国高知とは」というのを記載すれば、初めて読んだ方も理解してくださるのではないかと
 - ③ビジョンかプランかについては、計画を緻密に作る作業も必要ではあるが、我々は早く行動に移し、行動しながら計画をブラッシュアップしていくほうが良いのではないかと。ビジョンとプランの間と事務局が説明していたが、まさに私もそう思う。そのような形でこれからビジョンに取り組んでいき、来年、再来年でプランが書けるようにしていってらどうか
- ・ビジョンの計画期間は2年というよりもその後も続くという理解でよろしいか（霜浦委員）

→第4期産業振興計画の終期に合わせて2年間取り組み、その後見直しをかけて第2次ビジョンを策定するという事を考えている（事務局）
- ・資源量を復活させていくためには県内の機運を高めていくことが大切なので、将来の人材育成という点でも、学生が関わっていくということが重要。インターンシップ的な関わり方もできるのではないかと。観光メニューや商品開発をビジネスコンテストみたいな形で学生に提案させて、それを試行的に商品化して販売まで行うというような形で、学生目線のアイデアを積極的に生かしていけるような取組があると嬉しいと思う（霜浦委員）